

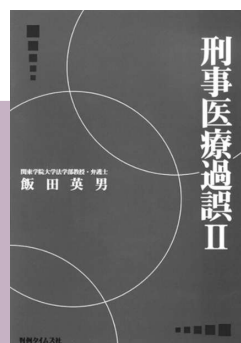
刑事医療過誤の傾向と問題点の整理に

[評者] 小林正哉 東京海上日動メディカルサービス株式会社
取締役企画部長兼メディカルリスクマネジメント室長

刑事医療過誤Ⅱ

飯田英男 著

A5 判, 690 ページ
定価 6300 円(本体 6000 円+税 5%)
判例タイムズ社 TEL. 03-3260-7161



■高まる医療従事者の法的責任に関する知識へのニーズ

弊社のメディカルリスクマネジメント室はこの10年余り、病院などの医療機関・病院団体や医師をはじめとする医療従事者を対象に、医療安全管理体制の構築に向けたコンサルティングおよびセミナー開催などを主な業務として取り組んできました。業務を始めた当初から、医療過誤や医療事故に関する民事上の訴訟は増加傾向にあり、現場の医療従事者や事務職の皆さんは、それなりに対応に苦慮されていました。

当時は現場の皆さんから、組織としてリスクマネジメントに取り組むにはどんなところから始めたらいいのか、全国的にはどんな事故例があるのか、医療安全の風土を醸成するにはどんな研修や教育プログラムをつくったらいいのかといった質問や依頼が多かったと記憶しています。その後、1999年の手術患者取り違い事故をきっかけに、医療界全体に医療安全への取り組みが一気に加速し、今ではどの病院でもリスクマネジャーを設置し、独自の安全対策を検討するようになってきました。そうした環境変化のなかで、最近では、弊社に対する質問やセミナーの依頼も、医療従事者の法的責任に関する内容が非常に増えてきています。とりわけ医療従事者の皆さんにとって、医療過誤に関する刑事訴訟は自分自身に振りかかってくる現実の問題として関心も高く、事例を通して問題点をきちんと学習しておきたいというニ

ズが高いのだと推察します。

■最近の医療事故における刑事訴訟の実際を知り活用するのに最適

弊社では、そうした要望に応えるときに、本書を大いに参考にしています。医療事故に関する文献は相当数ありますが、刑事事案だけに的を絞ったものはほとんどありません。その点、本書は最近5年間の79例に及ぶ事例が掲載され、しかも態様別に分かれており、大変検索がしやすい構成になっています。

特に前半は、最近の刑事訴訟の大まかな流れと傾向が書かれており、そこだけを読んでも医療現場の方々が法的に留意しなければいけないポイントがよく理解できると思います。法律の専門家でない医療従事者の皆さんにとっては、こうした判例にはとっつきにくいと感じるかもしれませんが、各判例の冒頭には当該事案の要旨と他の類似事案の紹介もされており、問題点が整理しやすくなっています。法的責任を論じるときには個々の事例にあたるのが大事であり、自分の職種や職場環境に照らして事例を熟読すると、一層身近な問題として理解できると思います。また、時間の経過などの事例の詳細も分かることから、院内でのシミュレーション研修を開催する際の題材として活用するといった方法も考えられます。

リスクマネジャーや医療安全管理部門はもとより、看護管理者の方々にも、ぜひ本書を積極的に活用されることをお勧めします。